日本保育学会会報

2007年9月1日　発行
編集・発行 日本保育学会
編集責任者　戸田雅美

JAPAN SOCIETY of RESEARCH on EARLY CHILDHOOD CARE and EDUCATION

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-2 B,Rロジェ T-1
Tel 03-3234-1410 Fax 03-3234-1414
http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsrec/

●第139号●

●特集● 第60回大会レポート（十文字学園女子大学）

第60回大会は、会場校の温かい雰囲気に支えられ、多くの発表と大勢の会員による積極的な議論が展開された。開会式には、学術交流を記念して、韓国幼児教育学会の文美玉会長のご挨拶があり、新しい学会活動の芽吹きも感じられた大会でもあったと思う。文会長のご挨拶については、会報とホームページに掲載してあるので、ぜひご覧いただきたい。

議論が、この日限りのもので終わるのではなく、会員各自の研究と実践において、検討され続けることを願って、本特集を組むこととした。

第60回大会を終えて

準備委員長　平田 智久

日本保育学会第60回大会を、十文字学園女子大学（埼玉県新座市）で2007年5月19日（土）、20日（日）に開催いたしました。

大会参加者は、ご招待者を含め2577名でした。

最終発表件数は合計621件（口頭発表→463件、ポスター発表→149件、ビデオ実践研究発表→9件）となり、自主シンポジウムも31件あるなど盛会裏に終了できました。ただ、小さなキャンパスなので、会場に入りきれないなどご参加の方々にはご不便や窮屈な思いをさせてしまいましたことをお詫び申上げます。

第60回大会は「変貌する環境とこども」というテーマで行ないました。

開会は小川博久会長に続き、文美玉韓国幼児教育学会会長からもご挨拶をいただきました。

記念講演「‘生きている’を見つめ‘生きる’を考える」と題した中村桂子氏（JT生命誌研究館館長）のお話は、人間の存在を新しい生命科学の視座からご提言いただき大会開催にふさわしい内容だったと、参加者から感想を多く寄せられました。

津守真氏（お茶の水女子大学名誉教授）と森上史朗氏（子どもと保育総合研究所代表）による対談「今、倉橋を語る」は、本学の中では大きい教室（302名定員）を準備しましたが、廊下まであふれる盛況ぶりで、急遽2日目に収録したビデオを放映した次第です。

2つ目の対談は「環境としての『現代』と子どもの育ち」と題して、本田和子氏（お茶の水女子大学名誉教授）と小西行郎氏（埼玉医科大学教授）に登壇していただきました。歯に衣を着せぬお二人のやり取りに興奮した…との感想も聞こえてきました。

今年の特徴のひとつに海外からのスピーカーを多くお招きしたことも挙げられます。国際フォーラムでは「イタリア、ピストイア市の幼児教育実践をめぐって」と題し、イタリアからトゥリア・ムザッティさんとアンナリア・ガラルディーニさんが、OMEPフォーラムでは、「世界の保育者との学び合い」と題し、OMEP世界幼児教育機構アジア太平洋地域副総裁のドーリーン・ロンダーさん（ニュージーランド）が、学会企画シンポジウムIIでは「現代の子育て問題を考える―中国大都市における学前教育と子育て支援の現状と課題―」（国際交流委）と題し、馮暁霞さん（中国）が、大会準備委員会企画シンポジウムIVでは、「保育・教育の指導内容、方法を通して幼児期と児童期の接続を考える」と題し、キャサリン・ルイスさん（アメリカ）と洪勇姫さん（韓国）が参加されました。海外5カ国からのご参加により国際的な視野で討議が白熱しました。

特に今回は日本保育学会第60回大会ということもあり、保育学会60周年記念企画シンポジウム「幼児の生活の危機をめぐって―保育の立場でどう取り組むか―」が企画され、小川博久会長が司会、神山潤（東京社会保険病院）、汐見稔幸（白梅大学）、赤坂榮（足立区立おおやた幼保園）の三氏の話題提供で進められました。

本大会より口頭発表、ポスター発表、ビデオ実践研究発表のすべてが日本保育学会研究奨励賞の対象になったこともあり、どの会場でも熱心な討議が行なわれたことに、準備委員会としてうれしさとともにご参加の皆様にご協力いただけたことに深く感謝いたします。

準備委員会として実務面からのご報告もしなければなりません。

本大会での試みのひとつは、他学会ではおなじみになっているパワーポイントを使用しての発表です。

口頭発表463件のうち254件がパワーポイント使用、75件がOHC使用の申し込みがあり、ほとんどの発表で支障がなかったことは準備委員会として胸をなでおろすことがで

きました。ただ一部に機材使用のルール違反があったことは報告しておきます。OHC使用から当日にパワーポイントを使用したいという申し出や、発表時間に合わせた事前準備をお願いしておいたのにも関わらず参加しなかった発表者が3割もいたことなど、今後導入する際には徹底を図る必要性を感じました。

大きなお詫びをしなければならないのは「論文集」です。予想をはるかに超えた発表者数のためページ数が増えてしまい、電話帳のような論文集になってしまったことです。持ち歩くこともページをめくることもままならない厚さで、ご不便とご迷惑をおかけいたしました。この背景には会員の発表件数の増加もあり、今までの準備方法を踏襲しにくい状況になってきたことの証でもあります。本学会今後の改善事項として会員の皆様でご検討いただきたいと思います。

幼児の生活の危機をめぐって －保育の立場でどう取り組むか－

千羽 喜代子

保育学会60周年記念シンポジウム「幼児の生活の危機をめぐって」は、2000年、保育学会常任理事会のメンバーを中心に、「今の子どもと保育の危機にどう対応するか」（保育学研究第38巻第2号、第40巻第1号、2000年、2002年）の検討内容公開の延長線上での企画である。なかでも乳幼児が置かれている状況の深刻さを、「子どもたちの生命・生活の危機状況」、特に生命維持そのものの営みである幼児の「食」と「睡眠」を中心に、幼児の生活のあり様を問い直そうとの企画趣旨による。

まずは、課題提供者3名の発言内容を当日の発言者順にまとめる。

汐見稔幸氏：幼児の生活の危機の正体は、現代の生活変容による人間としての自然の育ちの危機、すなわち、「生活」の中で自然に育ってくる人間的素質・能力・性向の育ちの危機である。乳幼児の場合は、これらを意識的に教育するよりも生活の中で開発されるものであるが、①客観的な意味での乳幼児の育ちの危機と、②そのことに対して何とか手段を講じなければならないという意識の稀薄さという危機の二重構造がみられる。

赤坂栄氏：幼・保一体化園の園長の立場から。「食」と「睡眠」は幼・保の共通課題であるが、その問題の背景には「子どもの精神的不安定」が共通にみられる。①一人一人の子どもが集団の営みにおいて安定して生活できるよう、日々の保育の工夫、②子どもにとって望ましい毎日の生活態度や生活の営みに関心を示さない親たちの出現から、親と子が共に育つ幼・保園の実現のための工夫。

神山潤氏：「眠り」についての立場から。教育再生会議の親への緊急提言の一項目、「早起き・早寝・朝ごはんの習慣をはかる」を意識されていると推察した。これらは人が生きる力の源であり、睡眠不足は命のリスクである。人は寝て、食べて、初めて活動できる。また、朝食は規則正しい生活のリズムの一つの目安となる。これらの生物学的意義を理解すること。保育者は、単にスローガンとしてではなく理論武装をもって親を説得すること。さらに光環境と時間環境は人間にとっての環境を破壊する要因となりうる。

上記の提言に対する質疑・応答に司会の小川博久保育学会会長の発言を加え、以下の3つにまとめる。

①生命・生活の危機の所在・在り方を確認する必要から、確実な調査資料を整え、それらの結果を子どもに返し、子どもの日常生活の見直しに反映させる。②「睡眠」にしろ「食」にしろ、子どもの生活の変化をもたらしている元凶は大人の側にある。子どもの豊かな環境づくりのためには、まず大人の生活の再検討から。③生活の合理化・便利性や快適生活を求める人間の欲望がもたらす「つけ」が人の生態環境の破壊に及んでいるのではないだろうか。社会問題、環境問題のレベルに連ながっていく。

●*Profile*
千羽　喜代子（ちば　きよこ）
大妻女子大学名誉教授
東京福祉大学 社会福祉学研究科 児童学専攻長・教授
保育者養成に努力しております。
共同研究：現代の幼児の発達調査を行ない３年が過ぎました。まとめに入っております。

準備委員会企画シンポジウムⅢ「地域における子育て支援」に参加して

金山 美和子

シンポジウムのサブテーマは「父親支援の現状と課題」である。子育て支援の取り組みは当初、仕事と子育ての両立支援をめざし保育サービスの拡充に重点が置かれた。近年、在宅乳幼児と保護者を対象とした子育て支援の必要性・重要性がさまざまな実践や研究から明らかになり、地域における子育て支援の展開が図られるようになった。しかし、子育ての大半を母親が担っているわが国の現状から、現在の子育て支援の多くが実質的には母親を対象とした支援である感は否めない。父親の育児参画を支えることは、同時に母親の負担と不安を軽減する支援でもある。父親支援は、今後の子育て支援の最重要課題のひとつであるといえよう。父親支援を研究テーマとする私は、期待をもってシンポジウムに参加した。

シンポジウムでは、相談業務、子育てひろば、子育て支援センターなどの支援の現場で得られた実践と研究に基づく話題提供がなされ、加えてカナダの父親支援の先進的な取り組みも紹介された。子育て支援の現状からつぎのよう

な父親の姿が浮かび上がった。支援センターやひろばを利用する父親たちは支援者からの過剰な働きかけを好まないことや、ある程度の広さが確保されたひろばやセンターが父親にとって居心地のよい場所であるということである。そして父親も母親同様、子どもと二人きりで向き合うことに煮詰まってしまったり、仕事と子育ての両立を辛いと感じたりすることがあるということである。

討論から明らかにされた最も根本的な課題は父親の育児時間の保障である。国際比較調査の結果では日本の男性の育児時間は調査国の中で最も短い。（平成18年度版国民生活白書）長時間労働は父親の育児時間を減少させるばかりでなくわが子とかかわる気力や体力をも奪うことになる。育児時間の短さは父親が自己の働き方を見直すだけで解決する問題ではない。それはすなわち企業における子育て世代の働かせ方の見直しが迫られているということである。討論ではまた、支援者のかかわり方や支援内容の検討も課題となった。支援者は父親を特別扱いせず必要な配慮をすることが大切であり、それには父親を支えるための支援者のスキルアップや男性支援者の養成が重要であることが示された。

シンポジウムに参加し多くの示唆を得た。父親支援はまだ、「地域子育て支援の先進的な取り組み事例」の域を脱していないと思われる。まずは、父親が子どもと気軽に地域に一歩踏み出せるような子育て環境の整備が急務である。また、父親支援の検討には父親の支援ニーズや育児実態の詳細な把握が必要であると考える。これらの課題をふまえ実践と研究を重ねることにより、父親の子育て支援が確立されることを期待したい。

●*Profile*
金山　美和子（かなやま　みわこ）
長野県短期大学幼児教育学科
研究テーマは父親の子育て支援。現在は、企業における子育て講座の実践から母親も含めた働く親への子育て支援のあり方について研究中である。

今、改めて保育における おもちゃの持つ意味を考えたい

高橋　健介

シンポジウム「おもちゃは遊びをデザインする」は、子どもの遊びおよび保育のあり方をおもちゃ（物）という観点から考えるという趣旨から企画された。シンポジストとして登壇された4名の方々は、子どもとおもちゃの関係について精通し、それぞれの立場から話題を提供された。その一部となるが紹介したい。

おもちゃデザイナーの野出正和氏は、おもちゃづくりの他に、遊び空間のプロデュースをしている。そのような立場から、空間のあり方にも言及し、「一人でじっくり味わえるスペース」、「秘密基地みたいな感じ」「ゆったりと楽しく遊べるためのゆとりやスペース」が必要と述べる。子どもが自分のペースでおもちゃとかかわり、遊びを自らつくり出せるような環境の必要性を説いた。

下田保育園の下田俊郎氏は、その保育実践において、「時間の制約の少ない中で、子どもが自由に選ぶことを尊重し、夢中になって遊べる環境を用意していきたい」と述べる。また、慣らし保育での保護者の手作り人形を用いた実践が紹介された。その人形が子どもにとって心の支えとなり、午睡時に、この人形を抱いて寝ている。心が通い合うような物とのかかわりを大切にしている。

玩具研究家の三神静子氏は、保育におけるおもちゃのあり方を考えるにあたり、保育者はおもちゃの性質を知ることが必要と指摘する。例えば、滑り台とのかかわりを考えると、滑り台は変わらずにあるという性質を持っている。よって、集団で遊ぶ場合、そこが拠点となるという意味を持つ。逆に、ブランコなどは、その物の変化が遊びを活発にさせている。つまり、おもちゃの機能性の理解は、そこにかかわる子どもの育ちの理解につながるのである。

最後に比嘉祐典氏は、幼児が遊びでかかわる物を、ごっこ遊びのドラマをつくるための大事な物として位置づける。何にでも見立てられる可塑性のある素材であることで、子どものイマジネーションが高まっていく。保育において、知能的、認知的な因子について考える傾向もあるが、物とのかかわりによる創造性の因子について考える必要があのではないかと指摘する。

4名のシンポジスト、それぞれの話題提供から、幼児の遊びにおいて、おもちゃの持つ意味やその魅力について改めて考えさせられた。その一方で、おもちゃと子どもとのかかわりの他に、その場を共有する大人の存在がどうなのか気になるところであった。その意味で、指定討論者である小川清実氏の話題が本シンポジウムに厚みを持たせた。小川氏は、東横学園短期大学子育て支援センター「ぴっぴ」での親子の姿から、おもちゃそのものの魅力を伝える一方で、大人が夢中になっておもちゃとかかわる姿を紹介する。そして、おもちゃのあり方として「大人が遊ぶ楽しさを知っているかどうかが重要」と指摘する。保育におけるおもちゃのあり方を問うとき、子どもとの関係だけでなく、大人（保育者、保護者）との関係を問うことも必要があると考えさせられた。

●*Profile*
高橋　健介（たかはし　けんすけ）
宝仙学園短期大学保育学科
幼児の遊びのイメージに添った保育者の身体論的な援助のあり方について研究しています。また、幼児のイメージの題材となる様々な文化（メディア、玩具など）にも関心をもっています。

学会企画シンポジウムⅣ「保育の質を高める保育カウンセラーの条件」に参加して

小林 みどり

保育現場にいる、私たちの行っている保育という営みは、どこに向かい、どうあろうとしているのかを確かめること、また、2年目に入った大学院での学びの、私自身の課題を明らかにすることを目的に、保育学会に参加した。

カフェテリア沿いのグランドと木立の緑の色が、とても心に残った十文字学園女子大学のキャンパス。シンポジウムや口頭発表での話が渦を巻いている頭の中を整理しながら、何度もこの場を通った。

企画シンポジウムⅢでは、『保育の質を高める保育カウンセラーの条件』をテーマに、保育現場での保育カウンセラーの活動状況や、保育者との関係、これからの課題等について討論が行われた。

文部科学省の中央教育審議会答申で必要性が取り上げられた保育カウンセラー制度について、神長美津子先生から、その成り立ちや仕組みについての説明があった。「保育」という言葉が付いているのは、小中学校のカウンセラー制度が下りてきたものでは決してなく、子どもの発達を支え、保育現場の教育力を支え、保育の営みを活性化するという意味だということがまず語られた。

中央教育審議会で保育カウンセラーの方向性が出される以前から、実は様々な保育現場で保育カウンセラーの役割を担う制度が実施されている。これらの活動や制度の話が、話題提供の先生方から語られ、制度として確立していく上で、様々な問題や課題も挙げられた。指定討論者の大場幸夫先生からの投げかけもあり、「保育カウンセラーの立ち位置」についての話と、それに関連して、「保育の質を高める」ということが話題の中心となった。

「保育カウンセラーの立ち位置」については、一つは、公立、私立、または幼稚園、保育所など、園の設置状況による雇用制度や、保育カウンセラーの認定条件が確立されていないという問題がある。それらとも関連するいちばん大きな問題は、現場の保育者との関係性や体制づくりだということも明らかになった。それは、保育カウンセラーが存在することによって保育の営みが活性化されるということを、現場の保育者が理解すると、制度がうまく機能するということである。実際現場では、この辺りが難しいのである。

私が勤務している園でも現在、カウンセラーが週1日、園の子どもの様子を見たり、子育てに不安をもつ保護者の相談を受けたりしている。また、園独自に子育て相談の窓口を設けてもいる。保育者とは別の視点で子どもの生活や発達の姿を見ることで、個々の子どもの姿がより見えてくることを実感する。

企画シンポジウムでは、実践を検討する場を設けながら「保育カウンセラー」制度をさらに整えていく必要があることが、今後の課題となったが、私の園でも情報や実践の共有化による保育の向上が課題である。

自分自身の実践と絡めながら、保育カウンセラー制度検討委員会の今後の動向に注目したい。

●*Profile*
小林 みどり（こばやし みどり）
兵庫教育大学附属幼稚園勤務。
兵庫教育大学大学院修士課程在学中。

保育・教育の指導内容、方法を通して幼児期と児童期の接続を考える —文化に埋め込まれた「ふさわしい遊びや活動」とは？—から

湯浅 周子

今大会の数々のシンポジウムの中から、大会準備委員会企画シンポジウムⅣについて報告したいと考えた理由は、自分の研究とは大きく異なった角度から保育全体を問い直す視点を得ることで、私自身の立ち位置の再確認と、今後の進む道を模索する契機となるのではないかという思いを強く持ったからである。

本シンポジウムでは、まず鈴木正敏先生から、米国・韓国・日本の比較を通して幼小接続の問題へのアプローチを探るという主題が提起された。話題提供者は、米国からCatherine C. Lewis先生、韓国から洪勇姫先生、秋田喜代美先生、指定討論者は佐藤学先生、小田豊先生であった。

まずLewis先生が米国との比較から、日本の保育の特徴について、4点を挙げられた。集団生活の喜びを育てる工夫、内発的動機づけの重視、自己を発揮したりコントロールしていくこと、保育研究のあり方についてである。これらの内の半分くらいは日本の保育の欠点であるとの佐藤先生のご指摘があった。Lewis先生の肯定的な解釈を、受け手がどう考えていくのかが重要なのだと認識した。また、米国で近年活発なリテラシー教育に関する研究の流れについてのご紹介もあり、衝撃を受けた。

洪先生からは、韓国における5歳児教育の意味についての話題提供があった。遊びに教育の基本要素を入れ、構造性・系統性・統合性を付加することによって、「教育活動」として評価し、「遊びの教育的価値」を社会的に認識させるための努力がなされてきたということである。その制度の違いに大変な驚きを覚えた。特に、遊びの領域やテーマが100項目以上に細分化されているところである。また、根源的な部分で、遊び自体をそのように明確に評価できるものなのかという疑問を持った。

秋田先生からは日本における5歳という時期の位置づけの変化、幼児教育の独自性と移行について、特に語りに関する研究からの話題提供があった。実践記録のもつ限界と可能性についての部分で、出来事の中から、事実的記述以外の部分をどのように記録として残していけるのかという点が、大変興味深かった。

日本の幼児教育の歴史的変遷について、佐藤先生は、kindergarten・nursery・pre-schoolのどこか一つの流れで考えるのではなく、相互批判するのでもなく、三つをどう統合していくのかが、今後の課題であるとされた。最後に、小田先生が接続の問題は、安易に考えるのではなく、これから考えるつもりで取り組まねばならないと述べられていた。

本シンポジウムを通じて、異なる文化の話題から、刺激的な部分に囚われることなく様々に考えることが重要だと改めて感じた。接続問題にとどまらず、幼保一元化その他の社会の大きな流れや、自らの研究などについて、多々課題を発見し、考える契機となったと考えている。

●*Profile*
湯浅　周子（ゆあさ　しゅうこ）
東京学芸大学大学院教育学研究科　学校教育専攻
幼児教育コース　修士課程
お茶の水女子大学生活科学部　アカデミック・アシスタント
学校法人愛育学園愛育養護学校　非常勤講師

第60回大会開会式におけるご挨拶

日韓幼児教育研究交流の発展のために

韓国幼児教育学会 第15代会長
ソウル女子大学教授　　文　美玉

日本保育学会の2007年度第60回学術大会、おめでとうございます。韓国幼児教育学会を代表して謹んでお祝いを申し上げます。

1975年10月に設立した韓国幼児教育学会は、韓国の幼児教育と保育関連の学会として一番歴史の長い学会です。韓国幼児教育学会では、近年、「韓国幼児教育のアイデンティティ確立」と「幼児教育と保育の一元化」の二つのテーマに特に力を入れて学術研究を進めてきました。「韓国幼児教育のアイデンティティの確立」は、今まで韓国の幼児教育が西欧の幼児教育理論と方法の導入に偏りすぎていたところから脱却して韓国の長所と特色を反映した幼児教育理論を確立しようとしたものです。もう一方の「幼児教育と保育の一元化」とは、韓国が幼保一元化のための努力と、現在の幼保二元化の体制を改善するために学術研究をしたものです。韓国政府は今、幼保二元化体制の改善政策、幼、小、中、高、大学全体を対象とした学校制度の改編、幼稚園教育課程の改訂、オリニジプ（日本の保育所にあたる機関）の標準保育課程の開発と保育プログラムの資料開発を行っております。韓国幼児教育学会は幼稚園教育課程の改訂に関する研究を主管し、学制の改編や幼保一元化など、すべての政府の政策に幼児教育界の代表学会という資格で積極的に参加・協力しております。

私は、今日のグローバル化の時代において、人類の一番美しい姿は普遍性と個性が共存する一つのオーケストラのようなものであるべきだと思っております。東アジア諸国が、それぞれの国の幼児教育のアイデンティティを確立するとともに、共通の文化圏である隣接国との間の学術交流を通して、個性と普遍性の上で幼児教育理論と教育方法を確立することが何より必要であると思います。また、東アジアの国々が一緒に知恵を絞って、東アジアの長所を生かし、幼児教育の学術基盤を拡大することはとても重要であると思います。これらの凝集された力を土台に西欧、さらには世界各国へと学術交流を広げてゆけば、より影響力もあり、深みのある学術交流が行われるであろうと私は確信します。

日本と韓国の間でまず可能な方法としては、両学会が開催している学術大会に互いに参加し研究結果を発表すること、学会が中心になって両国の研究者を紹介し共同研究を活性化すること、両学会のホームページやニューズレターにそれぞれの国の情報を知らせて一般会員も学術情報を共有すること、などがあると思います。これから、互いに協議を行って発展的な学術交流方案と内容が開発されていくことを切に期待しております。

東アジアの幼児教育分野の学術交流を活性化するために、2006年3月に、日本保育学会と学術交流協定を結んだことをとてもうれしく思います。

日本保育学会の今後、ますますの発展をお祈りいたします。

ここには、文美玉会長のご挨拶の一部を掲載させていただきました。全文は、ホームページに掲載しております。あわせてご覧下さい。